



TITLE:

清代經世官僚陶澍の行政と思想

AUTHOR(S):

大谷, 敏夫

---

CITATION:

大谷, 敏夫. 清代經世官僚陶澍の行政と思想. 東洋史研究 1998, 57(2): 307-341

ISSUE DATE:

1998-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/155202>

RIGHT:

# 清代經世官僚陶澍の行政と思想

大 谷 敏 夫

はじめに

一 陶澍の生いたちと前半生

二 陶澍の學術と經世思想

三 陶澍の行政と經世思想家

(イ) 陶澍後半生の行政

(ロ) 陶澍の用人、吏治、理財策

(ハ) 包世臣、魏源の經世策

(ニ) 陶澍の鹽政改革

(ホ) 銀貴現象とその對策

おわりに

はじめに

清末經世を重視する漢人官僚が臺頭し、積年の行政の弊害を除去し改革を實施することによって行政の刷新を圖った點については周知の通りであるが、これら清末の經世官僚の指標ともなった人物が陶澍であった。清末の漢人官僚張佩綸は光緒五年張之洞に與うる書の中で「道光來の人才、當に陶文毅を以て第一と爲すべし」<sup>(1)</sup>と言っているが、行政官の先驅者

として陶澍が高い評價を受けていたことがわかる。因みに張之洞は清末の漢人官僚にあって清朝最後の行政改革に貢献した人物であったが、彼が若年經世の壮志を抱く契機を與えた人物が陶澍の後輩として咸豐期に活躍した胡林翼であった。<sup>(2)</sup>この胡林翼が尊敬していた人物が陶澍であった。ところで陶澍は湖南省長沙府安化縣の出身であるが、ここは省都長沙の西方に位置し、洞庭湖に流入する資江沿岸の中流域にあった。彼の生れ故郷は、この資江沿岸の安化縣小淹陶家灣という所であり、この附近は茶の生産地でもあった。ここで生産された茶は資江を下って洞庭湖經由で長江流域の經濟都市漢口に運ばれ、ここから中國各地に販賣されていた。<sup>(3)</sup>また省都長沙は湖南省の中心都市として早くから繁榮していたが、文化面についてみるとここには南宋以來の宋學の傳統があり、岳麓書院は宋學を學習、研究する場として多くの人材を輩出していた。陶澍は若年この岳麓書院に學んでおり、このことが彼の思想形成に關係がある點も留意したい。清末陶澍に始まって湖南出身の官僚が一大勢力をなし、特に内政改革に貢獻した點については拙稿で論じているが、陶澍自身に關する研究はまだ行っていないので今回そこに焦點をあてて論述する。陶澍に關する研究は、最近彼の出身地湖南でかなり進められ、その成果としての著作も刊行されている。<sup>(5)</sup>陶用舒氏は中國歷史學界が政治・階級鬭争を重視してそれに關係ある人物のみを取りあげ、統治階級の人物に對しては批判か全面否定をしていたと指摘し、これは誤った考えであるとのべた上で陶澍は中國歷史上傑出した人物で國家と人民に對して有益な貢獻をしたとその業績を高く評價している。<sup>(6)</sup>わが國における陶澍研究についてみると、既に一九七〇年代に佐伯富氏の大著『清代鹽政の研究』<sup>(7)</sup>で鹽政改革者としての陶澍について詳細に論じられているが、其後は水利行政について論じた拙稿の他、特に陶澍について論じたものはなかった。これは一つには陶澍が生きた嘉慶から道光期にかけての最大の政治課題が阿片の密輸、銀の流出、阿片戦争へと續く外政であり、研究もそこに集中していた點にあるが、筆者はこれら外政が内政と連動している點に注意し、内政の研究によりこの時期の實情がより明らかにできると考えた。その場合内政改革の先驅者として陶澍の行政はその出發點となるものである。この小論は以上の視點にたつて陶澍自身の人生の軌跡を辿ることによって彼の思想と政策の全體像を明らかにした

## 一 陶澍の生いたちと前半生

陶澍（字は子霖、號は雲汀、諡は文毅）は一七七九（乾隆四三）年、湖南省安化縣小淹陶家灣で生まれた。陶家の族譜によれば始祖陶侃は江西省鄱陽の人で晉代荆、江二州の刺史をつとめ長沙郡公に封じられたという高官であった。<sup>(10)</sup>この眞偽のほどは明らかでないが彼が始祖を晉の著名な地方高官に置いていることは行政官としての彼の自負心のあらわれであるとみてよい。陶侃の曾孫に陶潛（字は淵明）がいたが、陶澍は詩人としての陶淵明に限りない尊敬の念を抱いていた。<sup>(11)</sup>陶侃の子孫はその後吳・楚の間に散居していたが、後唐初九二三（同光元）年になって支祖陶昇が江西省吉州から湖南安化縣茅坪に遷居した。それから支族が増加し元末に族祖陶舜卿が茅坪より小淹に遷り、明末清初太祖陶耀祖（一六一八—一六八九年）に至りこの地の名望家として名聲を得るようになった。<sup>(12)</sup>この陶耀祖の子が陶澍の高祖陶志鳳（一六五六—一七二一年）であり、この頃陶家は當地の富裕な一族となっていた。ところで陶家が遷居した時期は五代、元末、明末といった不安定な政治情勢の時期に當っており、それだけに人口移動の現象が顯著であったわけである。陶家が最終的に湖南省西北部の安化を永住の地に定めた背景として明末清初の經濟的發展と係わっている。清代湖南で特記すべきことは、一つは米や茶の生産増加、一つは鑛山の開發であった。そしてそれを可能にした清代唯一の海外との交易地廣州を起點として湘江沿岸の長沙をへて武昌、漢口を結ぶ交易路があったことである。この交易路湘江が注ぐ湖南北部の大湖である洞庭湖には廣西に發する資江、貴州に發する沅江、省北西部に發する澧水等の支流が注いでいた。陶澍の生れ故郷安化小淹は資江沿岸にあり、山々が迫り水田は甚だ少なかったが、山の斜面を利用して茶や竹が大量に生産されるようになり、これらの商品を取りきする茶商、竹木商の往來もみられた。

これ等商業活動を通じて安化は湖南省都長沙や湘潭、湖北省都武昌や漢口、漢陽、更には長江下流の江南の諸都市とも

連結し、そこから江南の氣風が湖南各地にもちこまれたと思われる。陶志鳳の子である曾祖陶崇雅は「種植を習う外、時には茶を漢鎮に市る。旅邸事無ければ輒ち網を結び以て勞人に習う」<sup>(13)</sup>とあるように茶園を營むと共に茶を漢口に販賣したり漁勞にも従事していた。<sup>(14)</sup>しかし彼は五十才の頃死亡し夫人が家生を主持していたがその頃から家運は傾むくようになった。陶崇雅の子が祖父陶孝信であった。孝信はこんな中であつて學業に勵み、儒林郎、翰林院編修を贈られるほどの儒生でもあったが、生産を事としなかつたので家計は益々苦しくなつた。陶澍の父の陶必銓は孝信の四子であつたが、乾隆四四年の安化の大飢に際し、募錢して葬費を斂めたともいわれる節義の人であつた。<sup>(15)</sup>また若年より聰明好學であり、六才から堂叔より經及び子史を學んでいた。<sup>(16)</sup>但し家計は相變わらず苦しく生活費や學習費は時々周邊の都市の富人や學校に招かれて行なう子弟の教育に従事することによつて補つていた。陶澍は自らの家系について「草茅自り出て祖父より以上耕讀相承け、未だ嘗て出仕せず、絶えて攀援無し」<sup>(17)</sup>とのべているように遠祖は別として祖父に至るまでは安化の農家であり、時には茶商として成功したものもいたが讀書人として官界に入るほどの家系でなかつたと記している。それが祖父、父と讀書人としての道を歩み始め特に父は教育を職種とするまでになつていた。但し家計は苦しかつたので陶澍は幼少時から他家の手傳いとして家畜の飼養、木の伐採、魚の採取、土地の耕作など凡ゆる勞働を行い小錢を稼いでいた。この勞働に従事したことにより彼は生産者の勞苦を自ら感知することができるようになつた。<sup>(18)</sup>また彼は幼少より父に従つて故郷を出て資江流域の各地を訪問する内に茶商や運送業者、鑛山勞働者などの仕事も知るようになった。當時資江は茶の運送經路として利用されていたが、他にもこの附近一帯に產出する鑛石の通路でもあり、安化、新化等はその中心地であつた。

また沅江は資江同様洞庭湖に流入していたが、流域には辰州府治沅陵があり鑛石產出地でもあつた。當時これら鑛山では鑛徒がしばしば騒動をおこし治安が亂れていた。後年彼が鑛徒の滋事を防ぐ爲に湖南北區の鑛山の開控を嚴禁するよう進言したのはこのような事實に基づいていたと思われる。また沅陵の西北部邊境には武陵山脈があり、この邊一帯には早くから苗族の居住地がありこの頃反亂がたえまなく起つていた。このような湖南西北部の狀況について彼は嘉慶一九年、

江南道監察御史に就任した際に「湖南山田旱歉情形」として上奏している<sup>(19)</sup>。その中で嘉慶六年省城一帯の荒歉の際に奸民が機に乗じて劫擄したことを、更に嘉慶一二年五六月間の旱乾の際に安化縣でも放火擄物があつたこと、その安化が辰州と接壤して、しかもそこが苗疆と逼近しているのも民情が浮動していることなどをあげ、彼の故郷小淹でも焼かれた家が甚だ多いのに官に報じてもとよりあわなかつたから居民が相聚つて巡守したと實體験に基づいた報告をしている。そして陶澍はこんな偏僻な處で發生した小事でもやがて大事になるので地方官が責任をもつてことに對處するように皇帝に進言している。ここでは事件發生の原因となつた旱歉による米穀の不足を流通によつて解消すること<sup>(20)</sup>、それにかこつけて劫擄する者を嚴重に處罰すること、そしてこのような騒動が苗民の反亂を誘發しないよう未然に防ぐ策を講ずることをのべている。ところで彼が幼少の頃にに出合つた行政官で彼に最も強烈な印象を與えた人物は嚴如煜であつた。嚴は乾隆四九年、陶必銓、陶澍父子が長沙より資江を遡り故郷にかえる際に最に出合つたが、それ以後兩者の交流が始まつた。陶澍は後年嚴如煜に與うる書の中で「今先生は既に功業炳然として梓里に增輝す。而れども先子屢ば場屋に躓き諸生を以て終る。……先生と先子出處同じからず。而れども志と道は則ち同じ也」とのべている。これは陶必銓が省試を十度試みたが舉人になれなかつたためその才を行政に生かすことができなかったが、志と道とは嚴如煜と變らなかつたと父を評價してのべたものである。因みに嚴如煜は嘉慶期地方官として地方行政の再興を圖つた經世官僚であり、その功績については經世學者魏源も高く評價している<sup>(22)</sup>。幼少の陶澍が將來行政官となつた場合、まず最初に指針として仰いだ人物であつた。陶澍は道光六年嚴如煜が卒した時に墓誌銘を書いている。陶澍はその時江蘇巡撫として地方の高官になつていたが、同省の先輩である嚴如煜に最大の敬意を表し銘文を記している。そこには特に嚴が黔苗、川陝湖北敎軍對策に貢獻した點をあげ、「公は乃ち力めて堅壁清野の議を主とし、地の險要を相て寨堡を爲り、團勇正副長を選置し、且つ耕し且つ守り且つ戦う」とのべ、堅壁清野の法を現地に實施し敎軍を撃退したという。また彼が漢中府知府として行なつた鄉村再興策についても評價する。更に彼が残した治政に關する多くの書についても「後の經世に志を有する者、必ず將に取りて鏡とせん」とのべて

いる。また彼の夫人張氏が嚴を助け、漢中で手繰車をいれて民婦に棉花を紡織する利を教えたことも記し、夫婦相まって漢中の治安と産業振興につとめた點に注目している。因みに嚴如煜は號を樂園と稱し、生平范仲淹の人と爲りを慕いその名句「先憂後樂」を人生のモットーにしていた。<sup>(23)</sup>嚴如煜と共に彼が若年尊敬していた地方官は石韞玉であった。彼と石との出合いは乾隆六〇年、陶澍一八才の時縣學に入り諸生になった時の湖南學政が石であった。石は乾隆進士で川楚教軍の亂に際し勦保の幕客となり功績があった。<sup>(24)</sup>特に堅壁清野の法を用い反亂軍を鎮壓した。陶澍は石が卒した時に墓誌銘を書いているが、その中で石が湖南學政の時に知を受けたこと、陶が江蘇巡撫の時に紫陽書院の主講であった石と時時相見して地方の興利剔弊のことについて諮問したことをのべている。<sup>(25)</sup>陶は特に石が重慶に治するや、寛にして明、敏にして斷であり行政官として實績があったこと、また石が經世の學に長じていたことなどをあげ評價している。以上からもわかるように陶澍の行政官としての信念及び政策は、嚴や石のそれらを學ぶ中で形成されていた。

嘉慶五年二十三才の時、彼は父と共に長沙に行き湖南鄉試を受験し、父は不合格であったが彼は合格し舉人となる。翌年彼は北上して北京での會試を受けたが不合格となり、そのまま北京に留まって受験勉強をし、次年の會試に合格、嘉慶帝に召見し進士となり翰林院庶吉士を授けられる。會試の主考官は紀昀、熊枝、副考官は玉麟、戴均天であり、同榜進士に梁章鉅など十一人がいた。嘉慶八年彼は故郷に歸り「安化陶氏族譜」編修に参加、并びに湖南省長沙府屬の梅城、湘郷、湘潭等の地を遊歴する。翌九年北京に戻り翰林院にて研究生活に入るが、この年の冬消寒詩社に参加する。<sup>(26)</sup>後この詩社の成員となった賀長齡、林則徐、梁章鉅、李彥章、程恩澤、魏源等の人は、凡て陶澍の同僚、幕僚となつて活躍した人物である。彼の人脈がこの詩社を通じて擴大した。また紀昀を始めとした中央政府の高官にその才識を認められたことも彼の行政官としての將來を保障することにもなった。<sup>(27)</sup>嘉慶一〇年彼は翰林院編修を授けられるが、これを契機として後しばらく澧縣澧陽書院の主講、國史館纂修、四川鄉試副考官、甲戌科會試同考官などの文教關係の仕事を歴任する。特に彼が嘉慶一五年四川鄉試副考官として赴任した際に記述した「蜀輟日記」は四川の實情を調査研究したものとして評價され

(28) っている。ついで嘉慶一九年江南道監察御史、翌年陝西道監察御史を歴任するが、ここでは特に各州縣の吏治積弊を監察し陳奏している。(29) また同年江南漕務を巡視した際に「巡漕告示」を陳奏し衙門使費の裁革や委員需索の嚴禁など十二項目の規定をあげ、漕運に関する問題點と改正案を提示している。(30) このようにして彼は御史として地方行政の根幹にかかわる吏治・理財に関する實情の把握につとめたが、これらは彼がその後地方行政に携わる際のいしずえになるものであった。

## 二 陶澍の學術と經世思想

陶澍は行政官であり思想家ではなかったが彼の行政の根據をなしていた思想は經世致用の學であつた。經世致用思想は本來中國古代から存在していたが、これが學術として重要性をおびるのはまず明末清初であつた。この明清の交替期にあつて政治、經濟、社會、文化の凡ゆる面で經世致用が論じられていた。清朝の支配が確立すると文字の獄、禁書などの政策もあつて經世致用學はふるわなくなつたが、嘉道期以降清朝の支配が動搖するにつれ再び活潑になってくる。この時期内外の行政の諸問題が累積する中で經世致用が論じられるが、その結果明末清初に編纂された「皇明經世文編」にならつて「皇朝經世文編」が魏源によつて編纂された。(31) 魏源は湖南省邵陽の出身で若年省都の岳麓書院で學んだ後、江蘇省常州に赴きここで劉逢祿から公羊學を、李兆洛から史地學を學び、これらの學を根據として經世學を研究していた。魏源が「皇朝經世文編」を編纂したのは道光六年であるが、この頃彼は江蘇巡撫陶澍の幕友となりその朋友である同省出身の江蘇布政使賀長齡の代行としてこの事業に取り組んだのである。このようにこの時期を代表する經世官僚、經世思想家が湖南省出身であつたのは湖南の學術の傳統と係つていられる。湖南の學術は省都長沙の岳麓書院を中心とした湖湘の學が宋代に成立していた。南宋では朱熹が當書院で學を講じそんな關係で宋學研究が盛んとなつた。この朱子と交游のあつた張栻は衡陽に居住し理學を學んでいた。この張栻が師事したのは胡宏であつたが、その父親である胡安國と共に心性の學を始め、その「事功を以てて心性を言う」という思想は張栻、張載をへて明末清初の黃宗羲、顧炎武、王夫之の經世致用



學の理念ともなったといわれている。<sup>(32)</sup> 因みに王夫之は衡陽出身で張栻の後學でもあった。ところでこれら宋學の源流ともなった學者に北宋の胡瑗(安定)がいたが、彼は「周易口義」「春秋尊王發微」の研究者であると共に程頤の師でもあった。その一方で彼は四十餘才の時、范仲淹に推薦されてはじめて祕書省校書郎の試補となり政界入りしている。陶澍は范仲淹と共に胡瑗を尊敬していた。「昔胡安定蘇湖に教授す。經義・治事二齋を立て、一時經術極めて盛なり」とのべ、<sup>(33)</sup> 思想家、教育家としての胡瑗を評價している。このように陶澍は宋代の學風・士風を尊重したが、その傳統は湖湘の學に受けつがれているものと確信していた。清代乾隆末年から嘉慶年間にかけて岳麓書院に著名な學者羅典が山長となり經世致用の學を教授していた。ここに陶澍・魏源・賀長齡・賀熙齡などの人材が培養されることになった。陶澍は乾隆四九年、七才の時父が岳麓書院で學習していた際にその側で讀書していたが、この時の山長が羅典であった。これを契機に彼は機會があればこの書院で學んだ。湖湘の學術については、實學を尙び空談を尙ばない學風を特色としていたがこれが幼少期に彼の思想形成に影響を與えた。陶澍について魏源は「少くして經世の志を負い、尤も史志輿地の學に<sup>おくよみ</sup>邃し。至る所の山川、必ず登りて形勢を覽、利病を訪察す」とのべているが、ここにもあるように經世の志をもって史學や地理學の文獻を研究すると共に實地調査も行つて利病を訪察するというのが彼の學問研究の目的となった。彼自身「經を研し史を究めて致用の具となす」と<sup>(35)</sup> といっているように經史の學は實用に役立つものの手段であると考えていた。また「經は治を致すの理也」と<sup>(36)</sup> ものべ、經學は治政を致すための理としてとらえていた。ここに經學研究の目的は治政に役立つためにあるという彼の經世論がみられる。周知の如く章學誠は「六經皆史」とのべ、<sup>(37)</sup> 經書は史書であり史書は經世の書であると考えたが、これを更に一步進めて經史を治政の書として研究したのが魏源であった。魏源の學は公羊學の理論に依據していたが、陶澍は傳統的な經學の理論に基づいて治政のあり方を追求した。彼は經學の根本理念としての理と氣について「陰陽は一道也。道は即ち理也。氣は理に依りて而して立ち、理は氣に載りて以て行なう。既に理氣と曰う。豈に理無きの氣有らん哉」と<sup>(38)</sup> のべ、理を根本理念として氣は理によってなりたつという朱子學のとく理氣二元論で説明しており、この點では彼の哲學

は朱子學によつていたといえる。但し「夫れ天下一物あれば即ち一象有り。一象有れば即ち一理有り。或いは近くは諸を身に取り、或いは遠くは諸を物に取る」<sup>(39)</sup>とのべ、物が象を生じ、象が理を生じ、理が氣を生ずるといふように氣の本質を物としてとらえており、それが陰陽の理によつて變化して形象となるという視點に彼の思想の特色がみられる。そして伏羲、文王、周公、孔子の學說も「人に教うるに實象に即いて以て實理を求むるに非ざるは無き而已」<sup>(40)</sup>とのべ、實象について實理を求める書であるという。彼は亦易の哲理の中に變化の思想を探究した。「昔仲尼六藝を以て教を垂る。而して易は雅言に列せず。……聖人卦を設け象を觀て繫辭し以て吉凶を明らかにし、剛柔相推し、而して變化を生じ、其傳是に盡す矣。……是の故に易の道は變化の謂也。變化は剛柔相推の謂也」<sup>(41)</sup>とのべ、易の繫辭傳に基づき、萬物を生成する二元である剛柔が相い推すところに變化があるという。更に「一動一靜は陰陽の義也。盈虛消息は聖人之を言うに詳し。……天地の道終あれば始有り。庶物の則は行を爲し止を爲す。是れ動靜の根と謂う。實は循環の理に寓し、其の養を得て而して兩つながら成る所有り。其の養を失いて而して一に恃む可き無し」<sup>(42)</sup>とのべ、一動一靜は陰陽の義であり、この動から靜へ、靜から動へと變化するところに循環の理があり、しかもその事物の動靜を成り立たせているものは養であるという。「斯れ良<sup>よしみ</sup>は以て敦く、而して震は以て兢<sup>げん</sup>なり。頤<sup>い</sup>は養の象、維<sup>これ</sup>昭なり。山は以て止り而して泉は以て流る。蒙養の端は擬す可き也」<sup>(43)</sup>とあり易の卦によつて人々を教へ導くことの大切さをのべている。<sup>(44)</sup>ここにみられるように彼は絶えず變化する動きの中に眞理をみており、しかもそれが實物に即したものであり、それを導くものが養であるというのであるが、この養とは人材の育成といったものであると思われる。これは自分自身を省りみての言葉であつたし、彼が人生訓としていのは、朱子のとく「四書」の一つ「大學」の名句「修身齊家治國平天下」であつた。そしてこの精神を行政官の責務としていた北宋の政治家范仲淹の「先憂後樂」論であつた。彼は嘉慶十年澧縣豐陽書院の主講になつた時に、范仲淹が嘗てここで讀書していたのを知り、ここでの三年間この書院の再興に力を注いだ。<sup>(45)</sup>その後、道光元年、山西布政使在任中に「山西晉陽書院告示」を作成し、その中で「士は四民の首爲り。士習の淳漓は民風視て升降を爲す。故に民を化さんと欲

さば、必ず先に士を訓ず。而して其の道は則ち義利を辨ずるに在り<sup>(46)</sup>」とのべ、士風の淳厚か浮薄かが民風をよくするか悪くするかに係っているので、士に義利を辨ずる道を教育することが大切であることを指摘する。彼は亦「不廉不勤なれば則ち吏治壞れ、而して害は民に歸す。然らば則ち學術の得失繫る所重し<sup>(47)</sup>」とのべ、官が不廉不勤であることが吏治、民生にとって一番有害であるという。ここに彼の言う有能の士とは、廉恥・義利を分別できる人材であり、その士を育成する教育の場が書院であった。道光五年江蘇巡撫赴任後「蘇州紫陽正誼兩書院告示」を作成し、その中で「書院の設は學校を輔翼し賢才を興育する所以なり<sup>(48)</sup>」とのべ、學校教育の一環として書院をとらえている。そして學を爲す要として彼はまず「立志」をあげている。そこで「范文正公粥を畫き<sup>えが</sup>以て食し、而して秀才時、便ち<sup>すな</sup>天下を以て己が任と爲す<sup>(49)</sup>」とのべ、范仲淹は若年食も惜んで學習し、天下に責任をもつ人間になるための修養に勵んだことを例としてあげ書院教育の第一條にしている。次に第二條に「植品」をあげ、士が商賈であつたり工匠であつたりすると氣は自ら卑下に趨くし、そこから鑽營結納の弊害が生ずると指摘し、「己を行うに恥あれば以て士と爲るべし<sup>(50)</sup>」と恥を知ることの大切さをのべている。ここからみられるように彼は書院教育の目標とする人物に范仲淹をあげ、天下に責任をもつ士としての人格形成を重視するのである。ところで彼は鍾山書院の課藝として當時慣例化していた八股文中心の教育を批判する。彼は雍正帝が實學を崇んでいた點をあげ「夫れ學は何を以て實なるか。……實學有れば斯ち實行有り<sup>(51)</sup>」とのべている。また「尊經書院課藝序」の中で「夫れ國家人材を造就するに……書院の課試を以て貢舉の逮<sup>おと</sup>ざるを輔く。其れ諸生に望む所、豈に惟<sup>た</sup>だ是れ能く制舉の文を爲し、詡然自足を遂げん哉。亦將に之を厲<sup>はげま</sup>すに通經學古を以てし、而して諸<sup>もろ</sup>を用に致す也<sup>(52)</sup>」とのべ、人材教育における書院の課試の重要性、そこでは制學の文ではなく六經に通じ古を學び實用に役立つ教育を提唱している。彼はこのような書院教育を活性化する爲に書院の經濟的基盤となる捐納の獎勵や沙田の開発を進めている。彼は江蘇省江陰縣の暨陽書院について道光三年湖南省湘潭の人である江蘇學政周石芳<sup>(54)</sup>が書院の振興のため捐納した後に長江沿岸の沙漲の田三千餘畝を檢核して經費に充ててゐることを論じていたのを道光五年陶澍は早速とりあげ、山長の李兆洛に衡定させている<sup>(55)</sup>。李長洛は

この件について規定を作成し實施する。李兆洛は江蘇省常州の人で歴史・地理學を研究していた經世思想家であると共に中年以降は書院教育に盡力した人物である。李兆洛は暨陽書院の山長を二十年勤めたが包世臣は之を評價して「暨陽に主講するに及び江陰人士頗る能く信受す<sup>(56)</sup>」と云っている。陶澍は「李公と周公皆な肫然として諸生の業を以て業と爲す。……李先生定むる所の規程を觀るに余尤も諸生の爲に歎ぶ<sup>(57)</sup>」とのべ、李兆洛の書院教育を評價する。先述したようにこの李兆洛の學を魏源も學んでおりその學習の場が書院であつたところから考えても書院教育がこの時期の經世官僚や思想家を育てる場になっていたのである。陶澍は在野にあつて經世學の研究と教育に専念する李兆洛のような人物の存在を重視していたのである。書院を人材育成の場として重視した陶澍はまた幕中に有能な人材を集め政策研究に従事させていた。これら人物の多くは、地縁・血縁關係によつて彼の生まれ故郷湖南省北部出身であつたが、いずれも次代を擔う人材であつた。李星沅<sup>(58)</sup>は湘潭の人で任官以前陶澍の幕中にあつて章奏作成の仕事をしていた。胡林翼は益陽の人で八才の時益陽で陶澍に出合つて以來その才能が認められ、やがて女婿となつた<sup>(59)</sup>。左宗棠は湘陰の人で胡林翼の朋友であつたが、陶澍回郷の際豐陵で出会いその後彼の知遇を得た。陶澍死亡後、彼の子陶杕の養育に當ると共にその藏書に接し經世學研究を一層進めた<sup>(60)</sup>。胡林翼、左宗棠は咸豐、同治、光緒年間にかけて活躍した漢人官僚として知られているが、彼等は陶澍を尊敬しその政治理念や政策を繼承し清末の内政改革に寄與するのである。彼等の他にも湖南から人材が輩出する背景として、その源流は陶澍の學と政策にあつた點を指摘しておこう。

### 三 陶澍の行政と經世思想家

#### (1) 陶澍後半生の行政

陶澍は嘉慶二四年四二才の時に川東兵備道に任命され地方行政に携るようになるが、その後山西按察使、署山西布政

使、福建按察使、安徽布政使をへて道光三年四六才の時に安徽巡撫に就任している。この昇任は異例といつてよいほど早く彼の上司であつた督撫の推薦と共に道光帝の信任の厚さがあつたものと思われる。安徽巡撫在任中彼は長年に亘る虧欠の清查、官員の不正に對する行政處分、水利事業、豐備倉の設置、捻軍と棚民對策など種々の行政課題に取りこんでいる。この時の行政の成果が認められ道光五年五月、四八才の時に江蘇巡撫に調任する。その赴任のため安徽省都を離れて水路江蘇省蘇州に向かう途中運河最大の要地清江浦を視察する。清江浦は江南の米を首都北京に輸送する運河上の要地であるが、この周邊は淮河の下流にも當つており、しかも當時は黃河が淮河に流入していた關係上ここの治水が水利事業のかなめとなつていた。かくして治水と漕運が江蘇巡撫としての最初の任務となつた。漕運については運河による河運に對して蘇・松・常・鎮・太倉の漕に限定していたが、海上による海運を提案した。その結果道光六年には二回に亘つてこの地域の米が海運にて輸送されたが永制化には至らなかつた。これは海運によつて利益を失なう多數の河運關係者の反對があつたからである。また漕糧徵收に際しての官、吏、劣紳などによる不正の除去、更には銀貴錢賤による通貨變動に對する處置も行つた。次に江蘇治水に全面的に取り組み、道光七年から道光一四年に至る七年間に吳淞江、劉江、練湖、孟瀆、得勝、操港、白茆といった江蘇デルタ地帯における治水をほぼ完了した。<sup>(61)</sup>道光一〇年五三才の時、彼は江蘇、安徽、江西三省を管轄する兩江總督に昇任した。以後彼が死亡する道光一九年六二才の時までその職にあつたが、この間彼が全面的にとりくんだのが鹽政改革であつた。以上彼が地方行政に携つていた後半生の職歴を略述したが、次にこの間における彼の行政の實態について検討する。

#### (四) 陶澍の用人、吏治、理財策

用人とは官僚の任用、吏治とは官僚の實務、理財とは財政のことであるが、これらは相互に關連しているのでここでは總じてのべよう。官僚の任用は吏部の仕事であつたが督撫には下級の屬官を推薦する權限が與えられていたので彼はそれ

を十分に活用し有能な人材を拔擢した。この時期地方官が賄賂を取ることによって蓄財することをもって「三年清政府、十萬雪花銀」という言葉で表現されているようにこれが吏治腐敗の要因でもあった。彼が地方官に求めたのは賄賂を取らない清廉な政治であった。彼は地方行政の基本は州縣にあると考えていた。嘉慶一九年監察御史の際に各州縣の吏治積弊を監察しその對策を提示した。その中で州縣の錮弊が日に深くなつていく原因として「上司己を正し屬を率いること能わざれば則ち不肖の州縣即ち挾持する所有りて以て恐るる無く、而して循良の州縣又牽掣する所有りて前すむ能わず」とのべ、各省の最高責任者である總督・巡撫それに布政使・按察使がまず己を正して下屬を率いることが肝要であるという。その上で積弊除去の實例及び對策をあげている。彼が州縣官の行政を重視するのは、「蓋し治民は縣令より親きは莫し。而して察吏は郡守より親きは莫し。督撫司道は其の成を總ずる而已。故に守令人を得て天下得て治る可き也」<sup>(63)</sup>とあるように州縣官は親民官であつたからである。<sup>(64)</sup>州縣官（知州、知縣）の主なる職務は刑名（裁判）と錢糧の徵收であつたが、民と直接に接觸する官でありここでの行政が王朝支配體制の根幹をなすものであるという認識があつた。この州縣官の行政を直接監察するのが知府であり總督、巡撫、布政使、按察使、道員はその成果をまとめるものであり、ここから州縣官に人材を得ることが肝要であると指摘した。次に州縣官に人材を得るためにその賢否を見極めることが督撫の任務と考え陶澍は在任中それにとめていた。道光五年江蘇巡撫として赴任した際に「臣皖由り吳に來り各屬を接見するに心を實際に留むる人無くんば非ず。而れども才猷超出する者頗る少し。既に州縣の如きは親民の官、必ず須く人を得て理まるべし」<sup>(65)</sup>とのべ、江蘇に人材が少ない點を指摘する。彼は赴任直後、江蘇省について「江河の要區にして政務殷繁、財賦は他省に甲たり。目下海運及び漕米事宜を議籌するに尤も緊要に關わり責任甚だ重し」<sup>(66)</sup>とこの省の重要性をのべている。それだけに有能な實務官僚を屬官に拔擢しようとしたのである。<sup>(67)</sup>湖南長沙の人黃冕は彼が道光五年海運實施に當り上海に赴き現地調査した際その相談相手をしたがそれが盡く要領を得ていたということで江都知縣に拔擢している。黃冕はその後陶澍の推薦で元和、上海知縣、署太倉州知州、蘇州府同知、署常州府知府、鎮江府知府へと昇任し劉河海口疏治を始め水利

事業に貢獻した。陶澍は道光十年兩江總督に昇任すると「察吏恤民の諸務に於いて虚心講求、實力整理し、一切の積習を破除し、以て羣材勵翼を冀う<sup>(69)</sup>」とのべ、人材登用の爲に舊來の方式を一切に破除するという強い決意を表明する。その第一歩として兩淮鹽政を廢止して總督の兼管としたのである。その理由として兩淮鹽務は六省の民食に關わっており課四萬餘兩と外支各款が毎年二百餘萬兩もあり合計錢糧は數省の地丁ほどあるのに鹽務を擔當する官僚はその責務を果していない。更に「文武員辨に至りては向に鹽務に於いて往往として同に膜外を視、疏銷巡緝、認真出力を肯んぜず。甚しきに至りては規を得て包庇す<sup>(70)</sup>」とのべ、文武員辨が鹽務をおろそかにしている上に賄賂はとつていふとその實態を明らかにし、この弊害を除去し鹽政を建て直す爲には強力な權限をもって對處することが肝要であるといふのである。ここに彼は總督兼管のもとで鹽政の實務を擔當する鹽運使の職責を重視し極力有能な人材をそれに當てることにつとめた。「設し運司をして其人を得ざれば、或は家人を信任し或は書吏に假手し或は浮言に惑ひ、懲惡として難無く端を藉りて耗費し庫貯仍お虧く<sup>(71)</sup>」とのべ、鹽運使が書吏や家人に鹽務を任せるようになれば國の收入に支障をきたすようになるというのである。陶澍在任中の鹽運使としては王鳳生と俞德淵が評價されている。王鳳生については魏源が彼の死後墓表を書いているが、その中で「淮北票鹽大いに暢ぶ。陶公君の首議の功を以て奏聞す<sup>(72)</sup>」とのべ、淮北票法の實施は王鳳生の助言であつたことを明らかにしている。王鳳生が私販辦理に宜を失つたといふことで道員に降調された時もすぐ上奏して鹽務を擔當させている。ところで魏源は先の墓表の中でこの王鳳生と共に俞德淵も鹽政改革に貢獻した人物としてあげているが陶澍も亦彼を高く評價して彼の死後祭文を書いている。俞<sup>(73)</sup>については陶澍の同僚であつた賀長齡や林則徐が既に循良な官として評價していたが、陶澍は兩江總督となると誰よりも彼を適任者として鹽運使に拔擢したのである。「兩淮疲壞の際に値り<sup>(74)</sup>積欠五千八百餘萬に至り庫中洗うが如し。君事に莅<sup>おと</sup>めば則ち章程を整頓し浮費を刪し冗滯を去り商を恤<sup>あは</sup>み民に便し、鰥寡遂に起す<sup>(75)</sup>」とのべている。陶澍は江寧府知府であつた俞を鹽運使に推薦するに際し、「鹽務に於いて向に熟習するに非ざるも、其の平日辦事を觀るに有體有用、條理分明なれば兩淮の任に堪うに勝せん<sup>(75)</sup>」という。彼の死に際しては「古の所

謂死を以て事に勤むる者に非らざる邪<sup>(76)</sup>」と激賞しているが、それほどの決意をもって鹽務にとりくまなければ、積弊を一掃することは不可能であつたわけである。その一方で無能な人物は直ちに交替させられている。王鳳生が降調された時後任となつた楊振麟は就任後間もなく俞德淵に交替させられているし、俞の病後就任した劉萬程は自縊しているし、その後任の陸蔭奎は鹽務未経験といふことで姚瑩<sup>(77)</sup>に護理させている。陶澍は鹽運使の重責について、「兩淮鹽務の繁重は天下に甲たり。運司揚州に駐劄す。……止<sup>た</sup>だ名は六省の引地を轄するに實は遙に六省の事を操ること能わず」とのべ、その負擔過重なことを指摘し、それが原因で病發が多いとのべている。そこで「前運司俞德淵は所以に勞心焦慮し、而して一病して起きず。後運司劉萬程は所以に心力交悴し、而して病發して生を輕する也<sup>(78)</sup>」とあり、鹽運使の重責によつて死亡した兩者についてその差をのべている。以上陶澍は用人・吏治において公正かつ有能な實務官僚の拔擢、無能又は不正官僚の革退といった人事の刷新をすすめてきたが、それと共に文職間員の裁汰、任用方式の改正など州縣の行政改革も行っている。例えば江蘇省華亭縣の主簿の場合は「僅に水利を管するのみ。如し挑河等の事に遇へば、仍お應に縣に移して詳辦すべし。……該主簿司る所の水利事務は應に就近の該縣丞に改歸して兼管せしむべし」とのべ、主簿を冗官として廢止することを提案している。また安徽省懷寧縣は水陸交衝に當り政務の尤も殷繁なところなので精明歷練、賢能兼擅の員でなければ治理を資<sup>よ</sup>るに足らないから知縣は原定の題缺ではなく調缺に改めるべきであるといふ<sup>(80)</sup>。調缺とは責任の同等官より調任すること、題缺とは應陞應補の人員内から揀選して補用することであり、衝、繁、雜の三要素を兼ねるような懷寧縣の場合は經驗豊かな有能な人員を任用するため調任方式に改めるよう要請したのである。

# (イ) 包世臣、魏源の經世策

陶澍の行政官在任中彼にしばしば行政諸問題を進言していたのが包世臣、魏源といった經世思想家であつた。陶澍はこれら經世思想家を幕友として招聘し政策立案の代行又は參考にしていたのである。包世臣<sup>(81)</sup>は安徽省涇縣の出身であるが、



早くから經世の志を有し、嘉慶二年安徽巡撫朱珪の幕友となつたのを始めに後年何人かの經世官僚の幕友となり、道光七年江蘇巡撫陶澍の幕友となつた。その時彼は五三才になっており經世家として著名であつた。特に彼が道光五年協辦大學士戸部尙書英和に進言した海運策とそれまでの河鹽漕に關する彼の策をまとめて刻した「中衢一勺」は當時の最新の經世書として注目をあびたものである。これより先、包世臣は早くから郡縣制に關する經世策を提案している。嘉慶六年、郡縣の根本は保甲、學校、戎政、課績、農政の五事であるとし、その職務を遂行する知府、知州、知縣に人材を得ることをのべている。「夫れ政を爲すは心を正し以て實效を求むるに在り。心を細し以て眞勢を審らかにするに在り。……夫れ令は親民の職爲り。天下廣しと雖も縣を積み以て成る。故に其の職至要と爲す<sup>(82)</sup>」とのべ、政を爲す者の心構えとして實效を求め眞勢を審らかにすることをあげている。これは當時の行政官が實事にうとく世の中の動靜に無關心であつたことを指摘したのであるが、そのことが行政の腐敗を促進してゐたという認識が彼にあつた。ところで行政の腐敗を促進してゐた要素として地丁・漕糧の收納に際しての州縣官の浮收、胥吏の中飽といった不正の横行があつた。このことが錢糧の虧欠をもたらし國庫の收入を減少することになった。それはまた同時に錢糧を納める農民の民生を損なうことにもなった。このような事態を深刻な問題として受けとめてゐたのは地方に居住する經世家であつた。包世臣は「其れ虧空又何に従り來るか。凡そ此れ皆な貪黷の州縣言語を造作し上司を愚弄し以て其の腴民肥橐の私を遂ぐ。而して之が爲に上司或は其の患を受け、而して省察を加へず。或は其の賄を利して之が爲に飭詞し、以て浮動日々甚きを致す<sup>(83)</sup>」とのべ、虧欠の原因を州縣官の浮收とそれを監督しない上司の行政にあるという。このような州縣官の浮收が最も行われてゐたのは漕糧の徵收であつた。當時錢糧の徵收に際して官の浮收、吏の中飽、鄉紳の包攬が慣例化してゐた。鄉紳が民人の錢糧を官廳に包納するのであるが、この過程に不正が行なわれた。その一つに監生が自身の錢糧でないのに包攬代納し入己することがあつた。また官廳にあつては胥吏<sup>(84)</sup>が手數料をとつて錢糧事務を行つてゐたがその際中飽等の不正があつた。監生の不正行爲については、雍正五年の禁令<sup>(84)</sup>によつて治罪に處すことになつてゐたが、この禁令に違反するものがこの時期續出してゐたので

ある。陶澍は道光六年江蘇巡撫在任中に漕務改革のため杙棍の包漕による陋規の横索を嚴禁することに取り組んだ。<sup>(85)</sup>杙棍とは先述した郷紳の包攬を代行して私利を圖っている刁生劣監のことである。彼等は富家や勢力のある人に詭寄し健訟により陋規を得ていたのである。ここから陶澍の嚴禁令に對して利を失う刁徒や劣監それに漕書（漕運關係の書吏）がありとあらゆる手段によって抵抗した。陶澍はこのような刁生劣監の不法行爲を取り締ることのできるのは郷民とじかに接觸している州縣官であることを強調しその自覺を促している。包世臣は道光十八年自ら志願して大挑によって江西省新喻縣の知縣となった。そこで彼は漕糧徵收の際にそれを請負った紳耆と業務を擔當した戸糧書吏に布告を出し適正な納入を指示している。「世臣新喻に在りて辦漕するに漕運則例を恪遵し浮勤を禁絶す」とあるように雍正五年の則例を文字通り遂行しようとしたのである。しかしこれは必ずしも成功せず一年後彼は知縣を退官している。このように當時一部の陶澍や包世臣のような經世官僚が漕務の不正を追究はしたが積年むしばまれてきた官・吏・民の構造的汚職は容易に除去することはできなかったのである。ところでこの漕糧を河運か海運かのどちらのやり方で首都北京に輸送するかが重要課題となってきた。この問題については包世臣は早くから海運論を唱えていたのは先述した通りである。彼は沙船約三千五六百號が上海に聚っており、船主は皆な崇明、通州、海門、南漕、寶山、上海の土着の富民であり、一船を造る毎に銀七八千兩を須<sup>も</sup>い、その多き者は一主に船四五十號を有するに至っているとのべ、更に康熙二四年海禁がとかれると關東の豆麥を毎年上海に海運ルートで千餘萬石を運び、その代わりに布茶などの南貨を山東・直隸・關東に運送している。沙船を有する船商は會館を作り董事を立てて海運を運營しているという。そこでこれら船商を雇募して許可を與え江南の糧米を北京に輸送させる案を提示している。<sup>(87)</sup>その後民間の海運が一層發達する一方で運河、淮河の交流する地域での水害のため漕運が阻まれる事態が発生した道光五年に彼は揚州で「海運十宜」を著し具體的な海運策を提示する。<sup>(88)</sup>また當時やはり陶澍の幕友として政策を進言していた魏源も同年「籌漕篇」上を書き客の曰う「海運其れ行う可きか」の間に對して「天下の勢のみ」<sup>(89)</sup>と答へ、海運の利に國計・民生・海商をあげている。ところで先述したように中央政府内で英和が海運策を建言したのを

受けて詔が下され有漕各省の大吏がこの案を検討するが、當時安徽巡撫であつた陶澍は、蘇、松、常、鎮、太倉の四府一州の粟（もみ米）を全て海運に由ることを請うている。彼はまもなく江蘇巡撫に調任するが、自ら上海に赴き沙船の状況を視察したことは先述した。その後直ちに彼は兩江總督琦善と會議して上奏するが、その中で「海運は創行に屬すと雖も、海船實に熟習する所にして目前籌運の急策此より踰ゆる無し。惟折漕變價數百萬、勢として必ず銀は涌貴して穀は陡賤なり。恐るるは官民交困る。來年當に河海並運を以て宜と爲す。蘇松常鎮太倉の漕百六十萬石を以て海運に歸し、其れ江廣の漕は仍お河運に由る」と河海並運論を建言する。結局この案が採用されて河海並行となるが、これはあくまで二年間の臨時的措置とみられた。道光七年兩江總督蔣攸銘が新漕仍お海運を行うことを請うたが却下されてしまふ。魏源は同年「籌漕篇」<sup>(92)</sup>下を書き、客の曰う「河通じて漕故に復すれば則ち海運何ぞ之を用うる所か」の問に對して「河の患は國計に在り。漕の患は民生に在り。……河患は即ち時息有り。幫費は終に時免無し。孰ぞ河治して而して漕即ち治すと謂はん乎」とのべ、河工と漕運を同一に論ずることの誤りを指摘する。魏源はこの著を書くことによって海運の永制化を世人に訴えたのである。

ところで海運論提言の背景の一つにこの時期の江南の經濟狀況の反映があつた點について考察しよう。先述したように包世臣は江南の商品として綿布と茶が主要なものになつていた點を指摘しているが、江蘇巡撫に就任した陶澍は江南各地を視察し當地の綿工業の發展に關心をもつた。嘉慶五年以後の三十年間に中國より出口の綿花は一百萬匹以上に達したといわれ綿商人は各地に花行、花商、花市の商業組織を建立し社會上一つの勢力を形成していた。陶澍は上海吳園一帶の剪燈を觀察した際に賦詩を作っているが、その中で吉貝が黃婆の力によってこの地に普及し、多くの婦女が作業にいらしてゐる狀況をのべている。<sup>(93)</sup>吉貝とは綿花のことであり、黃婆とは元朝の人で上海烏泥涇にいて吳一帶に綿紡を指導したと伝えられてゐる。これ以後明清を通じて吳一帶に綿業が普及し、特に清朝道光初年には當地が綿業の中心地として繁榮してゐた。當時民間の海運業も興隆し江南の漕糧を公の事業として海運にて運送する政策の必要性が提唱されてゐたの

は先述した通りである。道光六年民間の沙船が官許を得て百五十餘萬石の漕米を海運にて天津に運送した際に、上海の士民がこれを機に黃婆の碑を建立することを謀って包世臣に意見を求めたのに對し彼は蠶絲より百倍も利のある綿布普及に功績のあった黃婆を祀るのは當然であると贊成している。そして更に太倉は米穀地帶として財賦の地であるが民が生業に安んじ東南樂土と稱せられるのは機杼があるからであると指摘し「此を以て黃婆の功を程るに其れ仰も國計の盈虛に關わる者、之を海運に較べて奚ぞ啻に什佰而已ならん哉」とのべ、黃婆の功は海運に較べて十倍百倍以上もあるという。<sup>(94)</sup>包世臣は民生の安定をもたらししたものとして綿紡織の普及の意義をといっており、これこそ國庫の充實に連るものと考えていた。ここには農を本としその業に携わる農民の生活保障を第一義とする彼の思想がみえている。しかしその一方では民間における船商の活動も十分みきわめており、國家がそれを用いることを提言している點、實事を尊重する經世家としての視點をもっていた。この點に關しては魏源も同様であり民間における船商の活動を利用することが國富の充實につながるという考えをもっていた。陶澍はこれら經世思想家の進言を十分理解して政策に反映させようとした點から考えて彼も亦農業、商業を共に重視した經世官僚といえる。特に彼が鹽政において票法を實施し、商人の自由販賣を許可したことは、商利を重視する彼の財政政策のあらわれとして畫期的意義をもつものであった。次に陶澍の政策の中でも最も重要な鹽政の改革についてのべよう。

## (二) 陶澍の鹽政改革

ここで陶澍の鹽政改革について要約しておこう。彼は道光十年兩淮鹽務積弊の原因についてのべているが、まず不肖の奸商が巧に名目を立てて庫本が全空を致したとい<sup>(95)</sup>う。

ところで商人が辦運する際の引課、場價、運脚、使費一切を成本というが、その中に商人の缺底一頃がありこれを根窩と名づけている。

それが底商のものとなり國課より先に利を收め、その餘は浮費となりこれが多くある。總商は開銷するにこれを散商より取り名は辦公と爲すも實はその名目盈千累萬して任意攤派するものだから成本がどんどん重くなっていく。かくして「成本既に重ければ則ち售價必ず昂し。而して私梟此に由り起る<sup>(96)</sup>」というのが彼の結論である。そして私梟が儀徵一帶に多いのは、そこが捆鹽の場であり奸商と商賈がそこで私に來帶を行い江船水手がそれに效尤するから私梟も顧忌する所がないのである。ここから私梟の販する所の鹽は場竈が産する所の鹽であると實情を指摘する。かくして「鹽務は拔本塞源、必ず須く奸商を革去し、別に殷實を招く。而して殷實の商又必ず須く章程を明定し浮費を刪去し總商攤派の累を受けざらしむ<sup>(97)</sup>」とのべ、奸商の革去と章程の明定など抜本的な鹽法の改革を提唱する。彼は續いて「再陳淮鹽積弊摺子」の中で「減價敵私、皆な正本清源の上策なり<sup>(98)</sup>」とのべ、鹽價を輕減することが私鹽を防ぐ良策であるという。時あたかも俞德淵が淮南儀徵で實施した經費削減案としての捆鹽の廢止に對して、これによって生計を維持していた捆鹽夫が縣の衙門に奔訴するという事件が起っている<sup>(99)</sup>。この事件は在地の紳士より中央政府に上信され御史が實情調査にのりだしている。これに對し陶澍は「伏して査するに、兩淮鹽務は遊民衣食の場なり。平時商門に依倚して苟くも溫飽を圖る者、蠅營に蟻附し勝へて數う可からず。遇々整頓有らば若輩に便ならざるを慮し或いは歌謠を偏造し、或いは蜚語を捏成す。……<sup>(100)</sup>即ち黃玉林の如きは一の緝私眼線の人に過ぎず。同夥幾何ん。乃ち其れ江海連絡、呼吸千里相通じ、憑空捏造、衆聽を搖惑す」とのべ、これらの事件の背後には黃玉林と同夥の人が澤山いてお互いに連絡し合つて騒動を大きくしているという。黃玉林は儀徵の巨梟であり私販の首犯であつたが兩淮鹽運使王鳳生の自首すれば免罪するという告示に一時應じたもののその後すぐ私販を行つていた。しかしこの事件を訴えた紳士が捆鹽を廢止したことが搶奪公行の事態を招いたという見解に對して彼はそれを否定すると共にその對應策として講じられてゐる「課を場竈に歸す」の說に反論する。この說は「就場徵課法」とも言い鹽課を鹽場において徵收する方法であつた<sup>(101)</sup>。この說は道光九年以降御史王贈芳、侍講學士顧純、光祿卿梁仲靖、太僕卿卓秉括が講じていたのである。彼はこれらの論者が皆なこの法を唐の劉晏の榷鹽法に習つたものであり、こ

れこそ「梟を化して良と爲し、官なく私なし」の良策と言っているが、この案は商運の法が實施されている現状にはあわないという。「晏當日は天下の鹽を總じて而して之を榷す。故に能く其の之く所を聽く。今は則ち某省は某處の鹽を食し各々口岸あり。……尙お此に因り遂に天下の鹽法を改めて盡く場竈に歸さば則ち紛更愈よ甚し。關繫愈よ大にして利權上より操らずして必ず下に移り、恐るるは豪強兼併の徒、據を得て利を爲し、其患私梟より甚しき者あり」とのべ、この法が實施されると豪強兼併の徒が利益を得て私梟より甚しい害をもたらすという。この上奏は道光十年「就場徵課法」の檢討を命ぜられて江南に派遣された戸部尙書王鼎<sup>(103)</sup>・侍郎寶興との共同意見であつたが、淮鹽弊端の對策として提示したのは浮費・夾帶・私販の三點を防止することが緊急の課題であり、そのための「兩淮鹽務章程十五條」の制定であつた。そして更に引き續き「票鹽章程十條」を制定し、淮北鹽場の銷岸三十州縣で票法を實施するという策であつた。票法とは鹽運使から三聯空白票式を印刷し、一は運署に留めて票根とし、一は分公司に留めて存査にあて、一は私販に與えて行運させるものである。ここに商販は納課後票を領して行運することが許可されるのであるが、このことは當時國家が特認した綱商が根窩を有し鹽利を獨占していたのを改革し、票を有する商人に鹽の自由販賣を認めるという畫期的な改革であつた。<sup>(104)</sup>

周知のように根窩とは引窩とも稱し引地に行販すべき鹽引を受領する權利のことであり、これを有する綱商が官吏と結託して鹽價を高くし利益を獨占していたが、このことによつて民は高價な鹽を購入しなくなつた。この隙に官價より安い私鹽が増加した。このことは國課・民生共に影響を與えることになつた。陶澍が票法の實施により「減價敵私」を實あるものにしたのは以上の理由によつてゐる。この票法の實施に對してまず御史鮑文淳の反論があつた。鮑はこの法の實施により徵收課銀の未完が三分の二もあると指摘したが、對するに陶はその原因は淮鹽疲敝が久しかつたことによるとのべ、そこには總商の鹽利獨占があつたことを明らかにしている。彼は「商人鹽を辦ずるに至りては、揚州に寓するも實に揚産に非らず。西南徽商の如く皆な向來鹽を業とす<sup>(105)</sup>」とのべ、山西や徽州商人が揚州に寄寓して鹽業を獨占しているという。そして「凡そ淮鹽を行銷するの處は、一體に民商を招徠し、地方官より給照し、揚に來り承充領

運せしめ、來者既に多く轉運愈々多からしむれば、國課民食に於いて均しく裨益有り」と結論する。かくして彼は票法實施に反對する御史鮑文淳は總商鮑有恆の近族であり、揚州で進士になる前に有恆から金錢の援助を受けていたし、その後も毎年坐食數千金の授與を受けていたといふ<sup>(106)</sup>。ついで道光十二年十月御史周彥が票鹽の法と場竈起徵とは名は異なるが實は同じであり、場竈起徵は私を利用して商を利さないし、給票行鹽は梟を利用して國を利しないと批判したのに對し、陶澍は「票鹽は官が設局を爲し、民販は局に在りて納課し、買鹽領票し、場竈起徵の散漫稽うる無しと廻かに異なる。而して納課買鹽し然後領票するは、國に於いて並びに利さざるは無し。縱<sup>(107)</sup>え、其人をして本梟販に係るも、而して領運有課の鹽は即ち齊民に屬すれば、已に曩<sup>(108)</sup>時の興販無課の私に比すべきに非らず」とのべ、票法が場竈起徵法とは異なるに異なる收稅法であることを力説する。ここには票法が官督商辦の新法として長年の積弊となつた總商獨占の鹽法でないこと、そしてそれが鹽商の活性化を生むと共に國課、民生兩面に寄與するものであることを力説する。しかし票法に關しては御史の批判があいつぎ、道光十四年には許求が「兩淮鹽務辦理支飭等の情」を上奏する。その中で「該御史復た梟私未だ靖ぜられざるを以て言を爲す。是れ始めは則ち臣を議するに按緝太嚴を以てし、今は又臣を責むるに緝私力めざるを以てす<sup>(109)</sup>」と御史の前後矛盾した陶澍批判を指摘する。また道光十五年は票鹽實施により創案が紛紛疊出したという批判に對しては、例えば皖省潁霍一帶の創案は票法實施以前から發生していた紅鬚捻匪の類であつて「票鹽に因りて始めて創案有るに非ず<sup>(110)</sup>」といふ。かくして彼は「査するに淮北票鹽成本較輕く、鄰私從りて侵灌無し。近年生齒日繁なれば、鹽片<sup>(111)</sup>本より多銷すべし。祗各處私充官滯に因り、是を以て銷路愈々窄なり。今票鹽の法、民に便にして即ち裕課を以てす。但に梟を化して良と爲すのみならず、而して且つ私を化して官と爲す。是れ官鹽の課即ち得たり<sup>(112)</sup>」と票鹽法こそ梟を化して良と爲すだけでなく私を化して官と爲すものであり國課の充實につながるという。ところで陶澍の票鹽法實施以前に鹽法の改革をといっていたのは包世臣であつた。彼は嘉慶二五年既に兩淮鹽法の弊害について「鹽法兩淮を以て大となす。……說者皆な私梟充斥し官引を阻壞し、遂に私梟を緝するを以て治鹽の要と爲すは、此れ下策也<sup>(113)</sup>」とのべ、私梟對策だけでは下策であるという。そ

れでは上策とは「商販の本地州縣の印照を領し、場官に赴いて桂號して徵課買鹽し、州縣發照後一面運司に具詳し查核すれば場官正課を乾没する能わず。而して運司と場員俱に平餘有り。州縣も亦鹽照紙硃の費を藉りて津帖辦公す」とのべ、州縣官、場官、運司の三者の責任のもとに商販を認めるといふものである。かくして「長江大河の轉輸迅速なれば民間鹽價必ず今より十の五六を減ず。而して私鹽十一種、皆な官課を輸し課入必ず今に數倍なり。梟徒化して小販と爲り失業して盜賊と爲り以て閭閻を擾害するに至らず」とのべて私梟取り締りだけでなく鹽法の改正こそ弊害除去にとって肝要であるといふのである。この包世臣の鹽法改革案は陶澍の票鹽法の先驅をなすものである。陶澍は包世臣それに魏源の進言を受けて票鹽法の實施を決斷するのである。包世臣は票法が實施された直後に「伏して念うに淮北鹽務久しく已に運商絕迹し正課虛懸なり。閣下倡に票鹽に改めて自り以來產額頗る増す」とその成果をあげている。しかし彼はいち早く票鹽の弊も指摘している。「按ずるに鹽法例として成本を核明し餘息を酌加し以て岸價を定め而して場價を定めず。場價騰貴に遇えば即ち奏請して暫く岸價を増す」とのべ、岸價を定めて場價を定めないうところにあるとし、更に「夫れ鹽法最も苦なるは透私にて而して私の止むべからざる所以は、科則の商に征するや太だ重きに在り。而して場商の竈戸を待するや太だ刻にして竈戸を苦累して賣私に非ざれば則ち以て自贍無し。科則太だ重ければ則ち梟徒買路の費取給する所有り。今票鹽科則輕しと謂う可し。而して私の止まざるは小販鹽を得ずして而して告ぐる可き無く、曬丁苦累して而して之を恤れむ莫き也。小販鹽を場商に得る能わざれば則ち増價して曬丁に買う。曬丁場商より取給する能わざれば則ち鹽を匿して梟徒に售る。梟徒改めて小販と爲して以來既に來りて而して錢糧之を有司に納むる能わざれば則ち轉じて巡緝の兵役に輸す。重集無籍、以て故業に習う。此れ梟の止まざる所以也」とのべ、包世臣は票法を實施しても私梟がやまない理由は、小販、曬丁など製鹽の現場で鹽の生産、販賣をする下層民の對策が講じられていないところに求めている。そこで彼は現場における壩價を平にして勢豪が暴利を貪ることがないようにし、その一方で池價を増して曬丁等の生活を保障してやることを提案している。そのようにして場に透私がなくなれば梟徒は自散するし、岸でよく暢銷すれば轉輸は自速し國庫は



充ち商も裕かになり鹽價も安くなり民生は安定するといふのである。包世臣の策は今後の鹽法の改革を示唆するものであったがすぐ政策に反映するものではなかった。先述したように現實には票法の實施そのものを批判する御史の上奏もあり、陶澍としては票法を軌道にのせることに力點を置いていた。こんな中で魏源は「籌鹽篇」を敍し「綱商本重く勢重きを以て力は鄰私に敵せず。而して反つて夾帶の私を増す。散商本輕く費輕きを何如せん。力は鄰私に勝るに足り、且つ本省の私を化す<sup>(11)</sup>」とのべ、票法の實施により鄰私を防ぎ得た點を指摘する。また「天下興利の法無し。其弊を去れば則ち利自ら興る。鹽政緝私の法無し。私を化して官と爲さば官自ら暢ふ<sup>(113)</sup>」とのべ、私を化して官となすことの意義をといっている。魏源の意見は陶澍の政策の基本となった「減價敵私」と「票法」を率直に評價したものであった。但し票法をより有効ならしめる策として、(1)額課減而不減。(2)場價平而不平。(3)壩工捆工裁而不裁。(4)各岸浮費不裁而裁。の四端をあげこれらの點について十分留意するよう指摘している。このようにすれば科則四十餘萬、場壩浮費百餘萬、在場在岸官費二百餘萬、成本約四百萬を減輕するといふものである。特に(2)は場價を先定しなければ場商の壟斷に供するだけだし、(3)は子包改捆は岸銷に益がなくなつただ官役の把持儉耗の地となるだけだといっている<sup>(113)</sup>。魏源は包世臣と別の角度から場價、壩價の問題をとりあげていたが、彼の場合は鹽價の收入充足に力點を置いていたのであり、包世臣のように現場生産者、販賣者の生活保障をまず先行する考へではなかつたようである。魏源が「籌鹽篇」を敍述したのは陶澍死亡直後であるが、この草稿を後任の李星沅に呈している。李星沅は道光二五年江蘇巡撫となり二年後兩江總督に就任したものの淮鹽積欠對策に追われ、票鹽法を淮南にまで擴げるまでには至らなかつた<sup>(110)</sup>。それを實現したのは道光二九年兩江總督となつた陸建瀛であつた。彼は陶澍の海運や鹽政策を支持し、陶澍が道光六年一時實施して中止されていた蘇、松、常、鎮、太倉の白糧を海運することを提言しそれを復活している。また淮北で實施されていた票法を魏源の助言もあつて淮南においても實現した<sup>(111)</sup>。このように陶澍の實施した票法は散商の自由販賣を認可したものと時代の郷勢にそくしたものであつた。ただこれにも問題點があつたのは事實であり、國課、民生兩面からの批判もあいついたが、その後の鹽政の基本政策となつた

點はいうまでもない。次に經世思想家が鹽政を崩壞に導いた要因として銀價の昂貴をあげている點について検討しよう。

#### (4) 銀貴現象とその對策

魏源は或人が道光十載浮費を裁することを上奏して以來、淮課は四兩を減存し、食岸は每引三兩、加うるに場價、壩費、改捆費を以て每引成本十二兩となつて、ほぼ乾隆中の阿文成公の奏する所の數に符しているが、これではどうして再び減ずることが出来るのかと問うたのに對し、「乾隆中銀價每兩兌錢千文、今每兩兌錢千七八百餘文、是れ昔時の十二兩は未だ今日八兩の價に抵らず。……淮鹽十載以來、江南湖廣の大吏は整飭又整飭、彌縫又彌縫す。而れども銀價愈々昂く私充愈々甚しく官銷愈々滯る」<sup>(122)</sup>とのべ、銀價の昂貴が私充を増し官銷を滯している點を指摘する。包世臣は既に道光初年に阿片流入に伴なう銀流出と銀貴錢賤の現象に警告を發していたが、それはこのことが日常生活で錢を使用する小民に大きな打撃を與えたからという。彼は「民戸完賦も亦錢を以て折す。銀價高ければ則ち折錢多し。……國家正供并びに鹽關各課、四千餘萬に過ぎず。而して鴉片一項、外夷に散銀する者、且つ正賦に倍差す」<sup>(123)</sup>とのべている。包世臣はこのことの影響として「今年蠶收も亦豊かにして茶價每石錢五千に至る。木棉梭布は東南杼軸の利にして天下に甲たり。松太錢漕誤らざるは、全て棉布に攸る。今則ち洋布盛行し、價は梭布に當り、而して寛なれば則ち三倍なり。是を以て布市銷減す。蠶棉豐歲を得て而して皆本を償わず、商賈行なわれず、生計路細するは、其の由を推原するに皆銀貴による」<sup>(124)</sup>とのべ、蠶業、棉業の盛んな松江、太倉等江南の諸地域に洋布が盛行したことにより打撃を受け本がとれなくなり商賈が行なわれなくなつたのは銀貴現象のためであるという。そしてこのことが錢を使用している民の生計を壓迫するものと考え、その對策として「此弊を救わんと欲すれば、唯だ専ら錢を以て幣となし一切の公事皆錢を以て起數し、而して鈔を以て總統の用となす」<sup>(125)</sup>とのべ、錢鈔並用論を提唱する。これに對し魏源は「中國争うて西洋の銀錢を用い、内地の銀値より昂ければ則ち中國銀幣之行うに數百年、亦必ず時に因りて而して當に變ずべし。故に開源の利を曰う」<sup>(126)</sup>とのべ、開鑛して銀を自

鑄して洋銀に對抗するのが良策であるという。ところで銀錢比價が道光十年代になって銀一兩が制錢一六〇〇文にもなってきたので清廷もこの問題に全面的に取り組むことになった。道光一三年給事中孫蘭枝がその對策として「私鑄を禁じ小錢を收め、洋銀の價を定めて積弊を掃除し財源を阜裕するを期す」と上奏したのに對し清廷は兩江總督陶澍と江蘇巡撫林則徐に檢討を命じている。

ここに兩者は經世家の意見を參酌してその策を提言している。即ち「鴉片煙は洋よより進口し潛して内地紋銀に易う。此れ尤も大弊の源なり。之を洋錢を以て紋銀に易うるに較ぶれば其害愈々烈し。蓋し洋錢は折耗有ると雖も尙お成色全虧に至らず。而れども鴉片土を以て銀に易う。直に之を謀財害命と謂う可し」<sup>(128)</sup>とのべ、ここに明白に阿片流入が銀流出による銀貴の根本原因であると指摘する。それにしても紋銀の流出が洋銀の流入に較べて多いのは洋錢一枚が紋銀七錢三分に當っている點にあり、ここから外商が洋銀をもって紋銀を收買し本國にもって歸り加工鑄錢してそれを再び中國市場にもちこんで中國の銀を手にいれているという。そこでその對策としては(1)阿片の進口を禁止する。(2)紋銀の出洋を嚴禁する。(3)幣制を改革し銀幣を自鑄する。(4)洋錢と紋銀の價を同じくする等の策をあげている。<sup>(129)</sup>彼はこれらの策作りのため現地の年老商人の意見を參考にしている。そして「蓋し制錢の式を推廣し以て銀錢を爲り、民の利用に便なるを期す。竝びに洋錢に仿つて而して之を爲るに非らざる也。且つ洋錢一枚は即ち價を抑うるも亦六錢五分に係る。如し局にて鑄銀せば錢重は只五錢なり。之を洋錢に比ぶれば更に節省を爲す」<sup>(130)</sup>とのべ、銀幣の鑄造、重量、流通等に互つて具體的に檢討し、この言理有るに屬するに似たりという。この銀幣鑄造を局にて管理するといふ點はまさしく銀本位の貨幣制度確立をめざしたものであり、當時銀が通貨として交易の手段となつていた國際經濟にあつて畫期的な政策であつたといえよう。しかし當面の緊急課題はイギリスの阿片密買の増加に伴なう銀の流出であり、銀一兩が制錢一千六百文になつた段階で黃爵滋が「嚴塞漏卮以培國本」の一摺を奏したのを契機に道光一八年、清廷は各省の督撫に命じて解答を求めている。

ここに陶澍は「籌議嚴禁鴉片章程摺」を上奏し、「鴉片愈よ矜貴を益し、價值愈よ擡高を價す。價愈よ擡して紋銀の出

洋遂に愈よ多し」<sup>(132)</sup>とのべ、嚴禁論に賛同する。この段階では貨幣制度の改革をするにせよまず阿片嚴禁が先決であるという堅い決意を示している。そしてその對策を示した一項に「紋銀出洋、應に分別して嚴辦を加重すべし」<sup>(133)</sup>とあり、紋銀出洋數が萬兩に及ぶ者は一經査獲し立即に正法し海口に梟示して人心を快にして煙源を絶つとのべている。ここには多量の紋銀を出洋するものを處罰し、その一方で鑄を行つて早急に貨幣制度の改革をせんとした意圖が伺われる。陶澍は道光九年死亡するが、彼の意思是僚友林則徐に受けつがれ阿片嚴禁策の實施となつたのである。以上ここでは陶澍晩年の十年間に彼が最も力を注いだ鹽政の改革と通貨政策の問題について検討した。そしてこれら内政の問題が阿片密輸と銀流出という對外問題に連動していることを江南の地方官として彼が十分認識している點も指摘した。本論が意圖したのはこの點の檢證にあつたのである。

### おわりに

この小論は清代地方長官であつた陶澍の行政に焦點をあてて考察してきたのであるが、その結果彼が公正にして實務にも有能なそして何よりも憂國の人物であつた點が明らかになつた。すなわちその行政は吏治、理財の面で弊害の除去にとめ興利の爲に改革を行うなど行政刷新に盡力した。この陶澍の幕友として包世臣、魏源が吏治、理財に關する種々の策を進言していたが、そこには時代を先取りするものも多くあつた。中國王朝國家にあつては行政のあり方が國家及び民生の安定に係わつており、それを擔う官僚の行政への姿勢が肝要であるといわれている。所謂「治人ありて治法なし」という言葉がまさにそのことを示している。ここには法治より人治が優先するという思想がみられるが、それだけに公正且つ有能な人材が求められていた。しかし現實には官僚の汚職は公行していたし、陶澍のような公正かつ有能な行政官は少なかった。その理由に官僚個人の人間性の問題だけでなく科擧や行政機構にも原因があるというのが經世家の意見であつた。但し人治優先の思想は當時の經世家ももっていたし、陶澍のような行政官の出現を期待していたのである。

これは民とても同様であり、行政に直接参畫できない王朝國家にあつては民の立場に立つ行政官に託する他なかったのである。陶澍のような行政官をどのように評價するかについては、その時期の研究状況によって様々な見解がある。中國近代を革命史の視點で研究していた時期には彼のような清朝國家體制の再建に盡力した官僚は體制擁護派或いは清朝を封建國家とみる見方にあつては封建官僚ということになる。また陶澍が地主階級に所屬していたものとして地主階級封建官僚ともいつている。しかし最近でははじめにでも述べたように陶澍の改革を高く評價するところから地主階級改革派と稱せられるようになった。筆者は最近の陶澍評價に賛同するのであるが、但し陶澍を地主階級とよぶことに對しては異論がある。というのは陶澍研究に階級的視點を導入すると陶澍があたかも地主階級の利益を代表するかのようになり、ひいては清朝を封建地主國家ということになる。筆者は清朝を封建地主國家とはみていないし、陶澍をその代辯者ともとらえていない。むしろ陶澍は清朝國家の改革官僚として國用の充實、民生の安定に寄與した開明的な經世官僚として考えている。

## 註

- (1) 張佩綸『澗于日記』光緒己卯の條、參照。張佩綸については『清史稿』卷四百四十四に傳がある。それによると彼は張之洞と共に翰林四諫と稱せられ大政事有れば必ず具疏して是非を論じ、同時の言事を好む者と「清流黨」を號したとある。

- (2) 拙著『清代政治思想史研究』所收、第三部第一章「湖南官僚形成過程と經世思想」（汲古書院、一九九一年）參照。

- (3) 重田徳『清代社會經濟史研究』所收、第四章、「清末の產業構造、第一節 清末における湖南茶の新展開」（岩波書店、一九七五）參照。この中で安化の茶は湘潭茶と呼ばれ廣

く各地に送られていたことが記されている。また同著に安化縣は農民の八、九割までが茶業に従っていたとある。

- (4) 拙著註(2)の書、第三部 第一章論文 參照。

- (5) 陶用舒著『陶澍評傳』（湖南師範大學出版社、一九九五、八）

『論陶澍』（岳麓書社出版、一九九二、七）その他論文として『安徽史學』所收、陶用舒、石彥陶「陶澍與林則徐」（一九八四、五）がある。

- (6) 陶用舒、前述の著 參照。因みに陶用舒は「清官陶澍」という民間流傳の故事を幼時無産階級革命家であった王震が聞

き感動したという「紅旗」（一九八二、第二期）の記事を紹介し、陶澍の赴任地江南では民間では長い間彼が民の立場に立つ清官として尊敬されていた点を指摘している。

- (7) 佐伯富著『清代鹽政の研究』（東洋史研究叢刊之二、東洋史研究會、中村印刷、一九五六年十月）。本書は清代鹽政研究の基本的著書であり、筆者の研究も本書に負うところ大であることを附記しておく。

- (8) 拙著『清代政治思想と阿片戦争』所收、第三章、第二節「陶澍・林則徐の治政策」（東洋史研究叢刊之四十九、同朋舍出版、一九九五年二月）参照。

- (9) 陶澍研究資料としては『陶文毅公（澍）集』近代中國史料叢刊、第二十九輯」所收（文海出版社印行、民國五十五年十月）を用いた。尙本書底本は道光戊子、淮北士民公刊本によっている。この著の公刊は、道光庚子、海州許喬林が編纂したとある。本論の註では『陶文毅公集』を略して『全集』とした。陶澍、字は子霖、號は雲汀、諡は文毅。

- (10) 『全集』卷四十七 文集「例贈儒林郎翰林院編修顧考東江府君行述」。

- (11) 『全集』卷四十三 文集「靖節先生爲鎮軍建威參軍辨」「靖節先生書甲子放」があり陶澍研究を行っている。

- (12) 『全集』卷四十七 文集「曾祖父衡府君、曾祖妣彭夫人行述」に「伯舍公有幹略、手置十餘莊、尤好周人之急如己之意。……翎先公……業頗饒裕、居恆自尊重、每往佃舍、孫四五輩、騎馬尾之。……奴僕十餘人、待之皆有恩。……其盛德如此。」とあり、陶燿祖は當地の地主として十餘莊を所有し

ており、その子陶志風の代には佃戸がその土地を小作していたし、奴僕も十餘人もいたと記している。

- (13) 註(12)の資料。

- (14) 註(12)の資料に「嘗有雪夜入米室盜米者。府君跡之、得其居。乃所素識、寂然而返、終不言其人」とあり、隱德多き人物としても知られていた。

- (15) 註(10)の資料に「饑饉後道有死者。府君倡義募錢數陌數十、爲斂葬費」とある。

- (16) 註(10)の資料に「少時嘗拾薪摘老芽、市米以就學……平生不營財產、視阿堵物、猶土苴也。偶有贏餘、專置古籍、插架甚富」とあり、學費を自らまかない、少し餘裕があれば古籍を集め學業につとめた。

- (17) 『全集』卷四、奏疏「恭繳」。更に「惟有愚誠、我皇上拔臣於庸衆之中、不三四年由道員擢至封疆、此微臣夢想所不致也」とあり、自らの異例の拔擢を夢想にもしなかったと述べている。中國にあつては農民から士民に、また逆に士民から農民へと職種が移ることは多々あり、このような流動性こそ中國社會の特質であつた。

- (18) 『全集』卷三十四、文集「鴻雪因緣圖記」に、「陶子少賤、牧於斯、樵於斯、漁於斯、且耕且讀、其跡較多」とある。また『全集』卷五十三、詩集「消寒第六會同集印心石室、試安化茶、或詩四首」に「尙憶茶始製、時維六七日、山民歷懸崖、揮汗走盤礴、培根闢冬初、摘葉反春發……黃茶號晚出、味厚亦非劣、方其摘取時、藍筐徧山岵、晨穿苦霧深、晚焙新火烈、茶成與商人、粗者留自嚼、誰知盤中芽、多有肩

上血、我本山人、言之遂凄切」と茶栽培に従事する農民の勞苦を描寫している。王文彬『論陶澍』所收「關於陶澍詩歌之我見」にもこの點が陶澍の詩の特色として指摘されている。

(19) 『全集』卷九 奏疏「陳奏湖南山田旱歉情形摺子」に「嘉

慶六年省城一帶、偶因荒歉、即有奸民噓次山等、乘機劫搶、聚衆幾於千百……況辰沅所屬、逼近苗疆、民情浮動、尤爲可慮。即臣所居之安化縣、亦與辰州接壤。嘉慶十二年五六月間、因值旱乾、即有放火搶物之事。如小淹河曲龍塘洞底等處、被燒之家甚衆。報官不究、致有被燒。……此臣本籍見聞較切、恐他縣類此者尙多。或因山僻路遠、民隱無由上達」とあり、自らの經驗に基づきこの間の事情を詳細にのべている。

(20) 註(19)の資料に「伏思湖南山多田少、刀耕火種之民、終歲

勤動。雖遇有秋之年、猶必借助於茶蓼薇蕨、最稱艱苦。濱湖之田、遇豐歲、尙可有餘。舟航四達、般盤者多、民無蓄聚。閒有穀多之家、則又貪圖厚價、不肯零糶、以致近處貧民、挑負空囊、奔走終日、而不能購買、升斗有錢、無糶年豐、而啼飢者、比比然也。」と湖南の状況を説明している。その對策として有穀の家が厚價を得んとして糶買しないのを阻止して穀米を流通させることをあげている。また『全集』卷四十一 文集「與湖廣李制軍書」に、戶部の議による、「湖南常平倉穀碾米運京、另行買補還倉」の案に對しては、彼は私見として湖南の米穀保存、米價の狀況から目下は適切でないという。すなわち「是倉穀化爲漕米採買之舉……況常平倉一空、地方緩急失恃、其接近苗疆之區、尤爲可慮。……上年大

江南北、猝被水災、競赴楚省採買、商船絡繹連樞、而下民間積穀、但已糶盡、不得謂之餘米之區……聞湖南例價、每石五錢、即使盡行實給、民力已屬難支……」とあり、當時湖南の米が大量に江浙更には首都に漕運されていたが、陶澍は湖南の農村の狀況から判斷してそれに異論を唱えている。

(21) 『全集』卷四十 文集「與嚴樂先生書」。

(22) 『魏源集』所收「陝西按察使贈布政使嚴公神道碑銘」參

照。嚴如煜については拙著註(8)の書 第三章、第一節「嚴如煜の邊防論」參照。

(23) 『全集』卷四十五 文集「陝西按察使司按察使曾國通奉大

夫布政使銜樂園嚴公墓志銘」參照。この中に「生平慕范希文爲人、取先憂後樂、意自號樂園」とある。

(24) 『國朝著獻類徵初編』卷百九十五、「石疆王」參照。

(25) 『全集』卷四十五 文集「賞翰林院編修前山東按察使司按察使琢堂石公墓誌銘」に「公閱覽遠識、所爲文貫串古今、尤長於經世之學。……當公視學湖南、時漸受知於公、及撫吳方主紫陽講席、得時時相見、有地方興利剔弊事、輒就公諮訪」とある。

(26) 陶用舒 前述の書 第二章 宦海漫遊に 嘉慶九年二月

陶澍は同科進士 朱瑋、顧綢、吳椿、夏修恕、洪占銓等と消寒詩社を組織したとある。『全集』卷五十五、詩集「消寒第一會、朱蘭友邀同洪介亭、顧南雅、吳退舫、夏森圃、雙槐書屋賞菊」とある。謝正光「宣南詩社考」、「大陸雜誌」第三十六卷第四期に、宣南詩社の前身としての消寒詩社について研究されている。これによると胡承珙の『求是堂文集』卷四「消

寒詩社圖序」に詩社の全文がのべられており、嘉慶十九年の冬には董國華が發起人となり、先後參會した者に陶澍の名があがっている。『全集』卷五十五 詩集に董國華が陳用光、朱珩、胡承珙、錢儀吉、謝階樹を招いて西寓園に集り消寒第一集賦を爲つたとあり胡の文と一致している。謝氏によれば梁章鉅の「退菴自訂年譜」によって宜南詩社と改名したのは嘉慶二十一年にしている。謝氏はこの會がただ一部の京官の公餘の酬唱の詩會だと結論しているが、少くとも後年になって參會者に經世家が多いところからみてやはり維新思想交流の場でもあったと考える方が妥當であらう。また山腰敏寬譯「ジェームス・ボラチェク 清朝嘉慶道光年間の文人政治家の復権」(徳島市立高等学校研究紀要別冊、第三〇號 一九九六)によると、ボラチェクは知識階級派閥として宜南詩社をとらえ、これを翁方綱グループとしているが、この觀點はいささか強引すぎると思われる。

(27) 陶用舒前述の書、第二章簡略生平 參照。

(28) 『全集』卷末、行狀に魏源は「公少負經世志、尤邃史地輿地之學。所至山川必登覽形勢、訪察利病。典試四川、著蜀輶日記、西南要害、如指諸掌。」とのべている。また李兆洛は『養一齋文集』卷六「陶雲汀中丞蜀輶日記書後」に「宣政治弛張之所當、究古今成敗之所原」とのべているが、當時最高の歴史地理學者李兆洛に評價されている所からみてこの日記はすぐれたものであった。

(29) 『全集』卷五 奏疏「陳奏州縣積弊摺子」。

(30) 『全集』卷五 奏疏「巡漕告示」。

(31) 拙著註(8)の書 第二章 第四節「魏源の經世思想」參照。

(32) 註(5)『論陶澍』所收、夏石斌「陶澍經世之學探源」參照。

(33) 『全集』卷三十七 文集「尊經書院課藝序」。尙こでいう經義治事二齋とは、經義齋、治事齋のことをいい、齋課において經義と治事の二部門が立てられ諸生をその志に従って分屬したことをいう。齋課とは官課に對する語で師課ともいい書院の院長が實施する考課のことをいっている。このような考課は宋代胡安定が立案しているが、清代になるとこの課が盛んになってきた。章柳泉著『中國書院史話』二「書院的演變」第三章、書院學術傳授的方式方法的演變、第四節、興考課(教育科學出版社、一九八一年) 參照。

(34) 『全集』卷末 行狀。

(35) 『全集』卷三十六 文集「易學支流考」。また『全集』卷三十六 文集「毛詩禮微序」に「後世高談生命、逃之於空虛、議論日多、而無當於實用。學術之所以不能如古、蓋在是矣」とあり、後儒の空理空論を批判している。

(36) 『全集』卷三十三 文集「沅江縣尊經閣記」。

(37) 拙著「清代政治思想史研究」所收、第三部第二章(一)清代經世思想と經世史學(汲古書院、一九九一年二月) 參照。

(38) 『全集』卷三十六 文集「易學支流考」。

(39) 『全集』卷三十六 文集「周易實義序」。

(40) 註(39)に同じ。

(41) 『全集』卷三十六 文集「洪氏易通序」。



- (42) 『全集』卷五十一 文集「擬白居易動靜交相養賦」。
- (43) 註(42)に同じ。
- (44) 本田濟『易』中國古典選第一卷(朝日新聞社 昭和四十一年二月)「周易上經」「頤」の項に、「天地養萬物。聖人養賢以及萬民。頤之時大矣哉。」とあり、頤は養の象であることを記している。また「周易上經」「蒙」の項に、「象曰。山下有險。險而止象。……象曰。山下出泉蒙。君子以果行育德。」とあり、山下に險があり、そこに止まるは蒙であり、泉は山の下から流れ出るものであり、これらは蒙を啓く端緒になることをのべている。また「周易下經」「震」の項に「象曰。震。亨。雲來虩虩。恐致福也。」とあり、「艮」の項に「象曰。艮。止也。時止則止。時行則行。……上九。敦艮。吉。象曰。敦艮之吉。以厚終也。」とあり、これらは恐懼自戒していれば福を招くし、すべての事は止まるところ、終りが大切であることをのべたものであり、これらの易の卦を使用して自らが修養につとめ終りを大切にし、人々を教え導くことの意義をといっている。因みに「艮」の卦については、當時書論上でも重視されていた。包世臣「安吳四種」所収「藝舟雙輯」「述書中」参照。
- (45) 註(5)『論陶澍』所収、楊布生「陶澍主講澧陽書院考評」参照。
- (46) 『全集』卷五十 文集「山西晉陽書院告示」。
- (47) 註(46)に同じ。
- (48) 『全集』卷五十 文集「蘇州紫陽正誼兩書院告示」。
- (49) 註(48)に同じ。
- (50) 註(48)に同じ。
- (51) 『全集』卷三十七 文集「鍾山書院課藝序」。
- (52) 『全集』卷三十八 文集「尊經書院課藝序」。
- (53) 『全集』卷三十五 文集「庚午科四川鄉試錄序」に「經者恆久之至道、不刊之鴻教也。經術明則人才蔚起、……通經致用亦經正而庶民興……」とあり、通經致用こそ人材育成の基本であるという。
- (54) 『全集』卷四十一 文集「與周石芳先生書」に、陶澍は湖南省湘潭人の先覺に敬意を表している。また『魏源集』に「戶部左侍郎提督江蘇學政周公神道碑銘」があり、「安吳四種」卷十九「管情三義」「祭周石芳先生文」があり、魏源、包世臣共に彼の教育行政について評價している。また『清史稿』卷三百五十四、列傳「周系英」に、「會潁江大水、學政駐江陰。系英目擊災狀。貽書督撫、留官吏素得民者治賑務、假庫帑三萬兩、購米平糶、民感之」とあり、道光二年の大水に際し賑務につとめている。石芳は號、系英は諱。
- (55) 『全集』卷三十三 文集「暨陽書院增置沙田記」、向李兆洛「養一齋文集」卷九に「暨陽書院增置經費記」代がある。
- (56) 『養一齋文集』所収 包世臣「李鳳臺傳」に「君爲諸生、每試必冠曹。……及主講暨陽、江陰人士頗能信受。昆陵之雋亦從而假館。四方纖舟、問字者無虛日。君乃得各就性情所近、分途講授。就染既久、多能得其一體者。」とある。李兆洛については、拙著『清代政治思想史研究』第二部、第四章「常州李兆洛の歴史地理學」(汲古書院 一九九一、二)参照。

- (57) 註(55)『全集』と同じ。尙李兆洛も陶澍の行政を高く評價していたが、『養一齋文集』巻六「撫吳詩跋」に「公無一身一家之私憂、而有天下萬世之遠慮」とのべている。
- (58) 『清史稿』卷三百九十三、列傳、「李星沅」。
- (59) 胡林翼については、拙著註(2)の論文参照。
- (60) 高伯雨「中興名臣、曾胡左李、李鴻章周游列國」(波文書局、一九九七) 参照。
- (61) 拙著註(8)の書、第三章、第二節「陶澍・林則徐の治政策」参照。
- (62) 『全集』巻五 奏疏「陳奏州縣積弊摺子」。
- (63) 『全集』巻四十二 文集「聶容峰歲史篇四十首跋」。
- (64) 『全集』巻四十 文集「覆王垣夫先生書」に「在外者莫如州縣爲親民之官。州縣得人而天下理矣。州縣非其人、督撫例得而去之。然而是非顛倒、賢愚混置者、不一而足也。天下之未能悉協於理、實由於此。是以僕於甲戌冬上疏、請清吏治之源、痛言其弊。」とあり、州縣官の得人を強調する。
- (65) 『全集』巻四 奏疏「抵蘇後陳奏地方情形摺子」。
- (66) 『全集』巻四 奏疏「調補江蘇巡撫摺子」。
- (67) 『清史稿』卷三百七十九、列傳「陶澍」に「在江南治河治漕治鹽、並賴王鳳生、俞德源(淵の誤り)、姚瑩、黃冕諸人之力」とある。
- (68) 『清史稿』卷三百八十四、列傳「黃冕」。
- (69) 『全集』巻四 奏疏「陞授兩江總督摺子」。
- (70) 『全集』巻四 奏疏「恭報接受兩淮鹽政印務摺子」。
- (71) 『全集』巻十七 奏疏「再請復設兩淮鹽政摺子」。
- (72) 『魏源集』上卷「兩淮都轉鹽運使婺源王君墓表」に、王は徽州婺源の人、援例にて通判、道光元年浙江鹽政を兼轄、署知嘉興府、道光九年兩淮鹽運使になったとあり、科擧官僚でなく實務能力にて拔擢された人物である。また『清史稿』卷一百七十一、列傳、「王鳳生」。
- (73) 『全集』巻四十九 祭文「祭俞陶泉都轉文」に「道光五年夏由皖移蘇。其時高堰大潰、漕路塞。余議由海運、首拔君同知督糧司海運局。」とあり、陶澍は海運實施に際し、彼を同知督糧司に任用する。其後常州府知府、江寧府知府へと昇任し、鹽運使に拔擢する。また、『清史稿』卷三百八十四、列傳「俞德淵」。
- (74) 註(73)の祭文。
- (75) 『全集』巻十二 奏疏「諭旨保薦運司附片」。
- (76) 註(73)の祭文。
- (77) 『全集』巻十八 奏疏「諭旨保薦運使摺子」に「如前任淮南監掣同知姚瑩 精明幹練、經臣兩次奏護運使、辦理堪稱裕如」とある。又『清史稿』卷三百八十四、列傳、「姚瑩」に、「先後疆吏、趙慎畛、陶澍、林則徐、皆薦其可大用」とある。
- (78) 『全集』巻十八 奏疏「劉運使急公出缺、請派大臣查辦淮鹽摺子」。
- (79) 『全集』巻五 奏疏「江蘇裁汰文職開員摺子」。
- (80) 『全集』巻五 奏疏「酌改題調知縣并佐雜簡要各缺摺子」。
- (81) 拙著註(8)の書 第二章、第三節「包世臣の經世思想」參照。

- (82) 『安吳四種』卷三十八「齊民四術」「說學政事宜」。
- (83) 『安吳四種』卷三「中衢一勺」「庚辰雜著」三。
- (84) 『會典事例』戶部、田賦、催科禁令「雍正五年、議准、貢監生員、非本身錢糧包攬代納入己、以致拖欠者、不論分數、均黜革治罪」とある。
- (85) 『全集』卷七 奏疏「嚴禁衿棍包漕橫索陋規附片」。
- (86) 『安吳四種』卷七「中衢一勺」「復桂蘇州第二書」。ところでこの書は道光二六年包世臣が桂超萬に與えたものである。その第一書に「道光七年陶文毅爲四五六之奏、似而和盤託出、然其意主於尅丁以寬官。又不爲丁籌出路、而絕無意及寬民。是以奏定之後、竟未舉行。少穆繼之、兩次奏與丁爭、而不勝。大縣反增費、歲以萬計、皆由不知政本在安民之故也。窮則變、變則通、漕事至今可謂窮矣。」とのべ、陶澍の漕糧改正案としての四五六の奏は、その意が寬官にあり寬民ではなかったと手きびしい批判を加えている。又後繼の林則徐も同じ様子上奏したといっている。ここでいう四五六の奏とは、漕糧を常州四錢、蘇州、太倉五錢、松江六錢の割合で錢穀を折銀する案であるが、これについては第二書で具體的に計算した上でそれが大戸に有利で小戸に不利なことになるので均戸こそ肝要であるというのである。ここにも民生の安定を第一義とする包世臣の思想がみられる。
- (87) 『安吳四種』卷一「中衢一勺」「海運南漕議」。
- (88) 『安吳四種』卷三「中衢一勺」「海運十宜」。
- (89) 『魏源集』上「籌漕篇」。
- (90) 『清史稿』卷一百二十二、食貨三。
- (91) 『全集』卷末 行狀。
- (92) 『魏源集』「籌漕篇」。
- (93) 陶用舒 前述の書、第三章、改革業績、一 經世思想、參照。
- (94) 『安吳四種』卷二十九「齊民四術」「上海縣新建黃婆專祠碑文」。
- (95) 『全集』卷十一 奏疏「敬陳兩淮鹽務積弊附片」。
- (96) 右に同じ。
- (97) 右に同じ。
- (98) 『全集』卷十一 奏疏「再陳淮鹽積弊摺子」。
- (99) 『全集』卷十一 奏疏「覆奏儀徵紳士信稱捆鹽夫役、因聞課歸場鹽之議、糾衆赴縣哀戊摺子」。
- (100) 右に同じ。
- (101) 佐伯富 前述の書。
- (102) 『全集』卷十三 奏疏「覆奏課歸場鹽之說未敢遽行摺子」。
- (103) 『清史稿』卷三百六十二、列傳、「王鼎」に「陶澍得銳意興革、淮綱自此漸振、鼎之力也。……自禁烟事起、英吉利兵犯沿海。鼎力主戰。至和議將成、林則徐以罪譴。鼎憤甚還朝爭之力、宣宗慰勞之」とあり、彼は中央政府内にあつて陶澍、林則徐の政策を支持していた改革派であつた。
- (104) 佐伯富 前述の書。
- (105) 山腰政寛「陶澍の票法の採用について」「東洋文化」復刊第六十八號(平成四年三月)で票法の効果について検討している。
- (106) 『全集』卷十四 奏疏「覆奏辦理兩淮鹽務一時尚未得有把握摺子」。

- (106) 『全集』卷十四 奏疏「請復設鹽政奉旨訓飭覆奏附片」。
- (107) 『全集』卷十四 奏疏「會同欽差覆奏體察淮北票鹽情形摺子」。
- (108) 『全集』卷十六 奏疏「縷陳歷年辦理兩淮鹽務實在情形摺子」。
- (109) 『全集』卷十六 奏疏「覆奏票鹽搶案現在查辦不致貽累地方摺子」。
- (110) 『全集』卷十八 奏疏「淮南丁酉綱無著懸引請提出二十二萬引融於淮北行銷摺子」。
- (111) 『安吳四種』卷三「中衢一勾」「庚辰雜著五」。
- (112) 右に同じ。
- (113) 右に同じ。
- (114) 『安吳四種』「中衢一勾」附錄四上「上陶宮保書」。
- (115) 右に同じ。
- (116) 右に同じ。
- (117) 『魏源集』「籌鹽篇」上。
- (118) 右に同じ。
- (119) 右に同じ。
- (120) 『清史稿』卷三百九十三、列傳「李星沅」「淮鹽自陶澍整頓之後、歷年又多積欠。星沅疏陳引鹽壅積、課款支絀情形」とあり、鹽法の改革にも拘らず積欠が多くなった。
- (121) 『清史稿』卷三百九十七、列傳「陸建瀛」「淮鹽積敝、自陶澍創改淮北爲票鹽、稍稍蘇息、而淮南擅鹽利久、官吏衣食於鹽商、無肯議改者。建瀛悉其弊。」とあり淮南での鹽政の弊害を指摘している。『魏源集』所收の「淮南鹽法輕本敵私議自序」に魏源は淮南での鹽法改革を進言し、「上陸制軍請運北鹽協南課狀」では、淮南票商に淮南二十萬大引を協運せしめんとした際の問題點について陸建瀛に報告している。
- 尙李星沅、陸建瀛の鹽政改革については、佐伯富「清代道光朝における淮南鹽政の改革」『中國史研究』第二、所收（東洋史研究叢刊二十一之二、東洋史研究會、中村印刷、昭和四十六年十月）參照。
- (122) 『魏源集』所收「籌鹽篇」。
- (123) 『安吳四種』卷二十六「庚辰雜著」二。
- (124) 『安吳四種』卷二十六「再答王亮生書」。
- (125) 右に同じ。
- (126) 『魏源集』所收「軍儲篇」。
- (127) 『林文忠公全集』甲集 卷一 江蘇奏稿「會奏查議銀昂錢賤除弊便民事宜摺奏」。
- (128) 右に同じ。更に「近年以來銀價之貴、州縣最受其虧、而銀商因緣爲奸、每於錢糧緊迫之時、倍擡高價。州縣虧空之由與鹽務之積疲、關稅之短絀、均未必不可由於此。要皆偷漏出洋之弊、有以致之也。」とあり、ここには明らかに州縣虧空の由、鹽務の積疲、關稅の短絀が銀流出による銀貴現象であると指摘している。
- (129) 陶用舒前述の書 第三章 七、自鑄銀幣。
- (130) 註(127)と同じ。
- (131) 註(129)と同じ。
- (132) 『全集』卷二十三 奏疏「籌議嚴禁鴉片章程摺子」。
- (133) 右に同じ。

**THE ADMINISTRATION UNDER TAO SHU 陶澍,  
THE STATECRAFT BUREAUCRAT 經世官僚 AND  
HIS THOUGHT IN THE QING DYNASTY**

OTANI Toshio

This article is mainly to study the administration under Tao Shu who was a pioneer of the Han bureaucrats of the statecraft school in the late Qing period, and his thought. While Tao Shu was appointed as an administrative officer in the years from Jiaqing 嘉慶 to Daoguang 道光, the Qing Dynasty was facing internal and external crises: the Rebellion of the White Lotus Society 白蓮教 inside and the problem of opium smuggling by the British outside. Worse still, at that time the bureaucratic government was filled with bribery and hence became corrupt. The harmful effects of the finances for agricultural administration, grain transport, flood prevention work of the Yellow River and management of salt, were also getting noticeable. Confronted with these problems, Tao Shu determined to tackle the internal and external crises while carrying out the purge of the bureaucratic administration and the reconstruction of the finances.

The first chapter of this article is concerned with the childhood of Tao Shu and the first half of his life. The second chapter examines his academic achievement and thought of statecraft. The third chapter discusses the relationship between his administration and the statecraft scholars. It is subdivided into three sections: 1. the schemes for organizing the bureaucratic administration and appointment by Tao Shu; 2. the relation of the statecraft policies of Bao Shi-chen 包世臣 and Wei Yuan 魏源 to the administration under Tao Shu; 3. the reform of salt administration by Tao Shu and his currency policy. The striking feature of this article is its explication of Tao Shu's administration and thought as a whole, especially the relationship between him and Bao Shi-chen and Wei Yuan, the two statecraft scholars who had significant influences on his administration, as well as Lin Ze-xu 林則徐 who took charge of the government of Jiangnan 江南 with him.